

## 基調講演

## 21世紀の日本に求められる英語教育

吉田 研作

## —はじめに—

日本の英語教育は一体何をしようとしているのか、また、どこに向かっているのか。

21世紀を迎えるに当たり、早急に我々はもう一度この点を考えなければならない時期にきている。現在の経済の混乱を見ると、一国の経済がいかに世界の経済に影響を与えるかが身にしみて分かる。一国の環境破壊はもはや国境を越えて地球全体の問題として認識されなければならないとなっている。日進月歩を続ける情報化時代の進展も、今や我々が世界の一市民として行動できなければならないことを思い知らせてくれる。そして、これら全てのできごとは、一国の身勝手な解釈を越えたグローバル・スタンダードを設ける必要性を示唆している。

このような急激な世の中の動きに対して日本はどのような姿勢で対処しなければならないのか。そして、その中で外国語教育が果たすべき役割は何なのか。本稿では、このような状況に置かれている日本の21世紀の英語教育について考えていく。

## —学習指導要領に見られる外国語教育の捉え方の変遷—

1960年に発布された高等学校学習指導要領の外国語教育に関する項では、まず、外国語能力では、「聞く能力」、「話す能力」、「読む能力」、「書く能力」、「基本的な語法」の学習が目標として挙げられていた。また、文化面での記述では、「外国語を日常使用している国民について理解を得させる」ことが挙げられていた。つまり、高度成長時代以前の日本の英語教育では、いわゆる4技能と基礎文法（語法）が強調され、それを用いて外国を理解する、という受動的な目標が設定されていた。

しかし、高度成長時代に入ると、その目標がにわかに変化してきた。1970年に施行された高等学校指導要領では、「外国語を理解」することと同時に、自らの考えを「表現する能力」が4技能と一緒に明記されるようになった。また、この時の指導要領では、外国の人の「ものの見方などについて理解」することと同時に、「国際理解の基礎をつちかう」ことが目的に加えられた。つまり、ここでは単なる4技能

ではなく、外国語を通して「理解」することと「表現」することに力点が移ったと同時に、「国際理解の基礎」能力の育成という能動的な観点が取り入れられたのである。

その後の1978年の改定では、1970年とほぼ同じ目標が繰り返されたが、1989年の改定では、更に一歩進んで、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが加えられた。コミュニケーションの重要性が説かれるようになったのは、この改定からである。また、それまでの「国際理解の基礎」能力の育成から「国際理解を深める」という目標への進展が見られたのである。つまりここでは、より積極的に外国語を使ってコミュニケーションをする「態度」の育成が必要で、しかも、国際理解能力の基礎が既にできているという前提で、実際の国際理解を「深める」ような指導の重要性が述べられているのである。

さて、次の指導要領の改定では、1998年7月に発表された教育課程審議会の提案で今までと大きく違うところの一つ、「実践的コミュニケーション」という表現がその中心に据えられるだろう。単に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成するだけでなく、「実践的」にコミュニケーションが出来るような教育をしていかなければならない、ということなのである。そして、もう一つ見逃せないのは、中高における外国語教育を今ま

での「選択科目」から「必修科目」にすることを提案していること、また、小学校から導入される「総合科目」の内容に、国際理解教育や外国語教育が含まれていることである。それだけ、外国語教育の重要性が認識されて来ているのである。

## —IMDの研究から見た日本の国際競争力—

ここで一つ興味深い研究を紹介しよう。スイス、ロザンヌにある International Institute for Management Development という研究・教育機関が毎年出している、World Competitiveness Ranking というものがある。そこで日本だけを取り出してそのランクを見てみよう。

World Competitiveness On-Line  
THE WORLD COMPETITIVENESS  
SCOREBOARD  
Ranking as of April 19 1998  
Rankings

Country	1998	1997	1996	1995	1994
Japan	18	9	4	4	3

(IMD Home Page)

ここで分かることは、日本は1994年には3位にランクされていたが、今年(1998年)には、18位と大幅にランクを落としている事である。この理由を探るために、このランク付けの基となっている要因を見てみると、8つある因子の中でも、特にランクが低かった「国際性」という因子が気になる。

World Competitiveness On-Line  
INTERNATIONALIZATION

Ranking as of April 19 1998  
Rankings

Country	1998	1997	1996	1995	1994
Japan	34	32	14	12	9

(IMD Home Page)

勿論、これは、「経済的」因子としての国際性なので、必ずしも我々が「国際性」と呼んでいるものとは一致しないが、それでも気になる数字である。そこで、更に調べてみると、次のようなことが分かる。この研究の責任者 STEPHANE GARELLI 教授は、"WORLD COMPETITIVENESS:NEW FRONTIERS IN 1998" (IMD Home Page) の中で、1998 年に特に強調したポイントとして次の3つを挙げている。

New frontiers in World Competitiveness for 1998 focus on three issues:

- the ability to manage the location of businesses to exploit the competitive advantages of different countries;
- the optimum utilization of assets to foster productivity;
- the development of interactive capabilities to unleash growth.

この中でも、最後の interactive capabilities に注目して更にその解説を見てみると、次のように述べられている。

**Interactive capabilities: Companies are developing their ability to efficiently conduct transactions with partners, suppliers, distributors and clients in a global and diverse**

**environment. To respond to this trend, countries need to unleash their own interactive capabilities. As a consequence, the interconnection of various infrastructure assets, such as technology, education or administration, has become a priority for public policy.** (強調は筆者によるもの)

(IMD Home Page)

まさに、コミュニケーション／ネゴシエーション／プレゼンテーション能力という、我々外国語教育に携わっている者にとっても避けて通ることのできない要因を指していることが分かるだろう。そして、最後にあるように、「技術」、「教育」、そして「行政」全てがより統合的な観点から見直されなければならない、というのである。

この研究が示唆していることは、我々日本人が 21 世紀の世界の中で生き延びていくためには、外国語教育の中で本気になってコミュニケーション能力の育成に取り組まなければならないということだと言っても過言ではない。

### —戦後の外国語教育の変遷—

ここで、戦後から現在に至るまでの外国語教育の基本的考え方の変遷を見てみよう。第 2 次世界大戦後の外国語教育に最も大きな影響を与えた考え方は、Audiolingualism だろう。この教育理論の根底には、当時主流をなしていた構造（記述）言語学と行動主義心理

学の考え方があった。

当時の構造言語学の基本的考え方は、languages are different というものであり、あらゆる言語の構造は独自のものであり、それは、数多くのデータから帰納的に導き出されなければならない、というものだった。いわゆる discovery procedure といわれる考え方に基づいた field work によって言語構造の記述が行われたのである。

また、行動主義心理学では、学習とは、ある刺激 (S) に対して正しい反応 (R) が「自動的に」導き出される回路の形成を意味し、そのような回路を作るために、正しい反応を絶えず「強化」することの必要性が説かれた。

このような考え方から生まれた Audiolingualism で最も強調された教授テクニックは、pattern practice だった。ある与えられた構造を、単語を入れ替えたり、変化させながら、何度も何度も練習することにより、その構造が「自動的に」「正しく」出てくるように訓練するものだった。

また、この Audiolingualism 以外の方法としては、現在でも多くの外国語教育の現場で用いられている「文法訳読」式の教授法があたかも外国語教育の本流であるかのように、使われてきた。

上記 2 つの外国語教育の考え方の基本にあるのは、言語を学ぶということは「構造を身につけることである」というものである。どんなに日常会話ができても、「文法構造」が分かっているだけでは、本当に外国語を学習したこ

とにはならない、というのである。

しかし、1970 年中頃から 80 年代にかけて、徐々に外国語教育に対する考え方が変わってきた (Yoshida, 1985; 1986 参照)。イギリスでは、Halliday を中心とした機能言語学の考え方、また、アメリカでは、Hymes の影響を受けて発達した communicative competence の考え方が盛んになっていった。そして、その考え方の根底にあるのは、言語習得は、単に言語の構造自体を身につけることではなく、むしろ、その言語を使って communication をする能力を身につけることだ、という考えである。言語習得において大切なのは、What one knows about the language よりも、What one can do with the language。つまり、言語習得の対象がそれまでの「言語構造に関する知識」の獲得から、言語を「運用」する際に必要な知識及び実践そのものに移っていったのである (Brown, 1994; Nunan, 1991 等参照)。

もう一つ重要な変化は、特に日本のように、日常のあらゆる言語行動がその国や地域の共通の母語で過不足なく行なえるところでは、外国語をその母語話者同士で使う必然性がない以上、外国語はあくまでも、その母語が通じない人とのコミュニケーションの手段であり、そのことから、外国語教育が異文化教育、異文化間コミュニケーション教育と切っても切れない関係にある、という点である。また、それに伴い bilingualism や multilingualism の個人的、社会的価値を認識することの重要

性が強調されてきているのである (TESOL ESL Standards, 1997参照)。

## II. 言語の4技能の修得から 言語運用能力の修得へ

さて、上記のような外国語教育の目的の変化に伴い、伝統的に言われてきた4技能の獲得の重要性に対する考え方にも変化が見られるようになった。Baker (1996) は、bilingualism の研究の立場から、Cummins (1984) の考え方を取り入れて、いわゆる伝統的な4技能の他に、Thinking を第5の技能とした。listening, speaking, reading, writing の能力だけでは、必ずしも「本当の意味で」人間らしい (homo-sapiens としての) 言語運用はできない。言語を使って「理性的に物事を考える」という能力も取り入れなければならない、というのである。

また、ACTFL (American Council for the Teaching of Foreign Languages) はいわゆるACTFL Proficiency Guidelinesを提唱し、従来の4技能を、それを使って「何ができるか」という基準で定義している (ACTFL Proficiency Guideline 他参照)。つまり、今後の外国語教育では、今までのskillよりも、proficiency が重視されることになるだろう。

では、proficienciesにはどのようなものがあるか。まず、self-expression, つまり、いかに自分が思っていることを相手に伝えるか、という「発信」能力がある。それには、音声モードによるものと文字モードによるものがある。

次に、comprehension だが、これも音声モードで伝えられた情報等の理解と文字モードで伝えられた情報等の理解とがある。そして、もう一つ、interaction, つまり、相手といかに意見等の交換をするか、という能力も忘れてはならない。田中 (鈴木, 吉田, 田中, 霜崎, 1997 参照) がいうように、コミュニケーションにおける意味とは、実際のinteractionを通して「作られる」(意味付けされる) ものなのである。

## III. コミュニケーションの領域

ところで、上記のような proficiency は、コミュニケーションがどのような分野で行われるかという「場面」や「状況」を前提とする。McNamara (1996) は、performative testing の重要性について述べ、例えば、看護婦なら、実際に看護婦が行う業務 (仕事) をどれだけでできるかを測定する方が、抽象的な「コミュニケーション能力」を基に言語能力を測定するより大切であることを述べている。確かに、performative testingは現実的で実践的な言語能力の測定方法で、英語が第2言語として使われている環境では大切なものだが、例えば、日本のように、英語を使う特定の場面や状況が設定しにくい環境においては、より一般性のある言語能力測定基準を設ける必要があるだろう。

そこで、主に前述のCummins (1984) の考え方を基に、下記のような状況を

設定してみよう。

■Cognitively undemanding (あまり深い思考を必要としない) な状況。これは、いわゆる「日常会話」の状況で、あまり難しい「議論」などを前提としない。先に挙げた proficiencies の観点から見ていくと、次のような状況が例として考えられるだろう。

- a) self-expression (音声モード：自己紹介、日常的な話題について話す、日常的な場面や状況の描写、喜怒哀楽を含めた感情の表現等。また、文字モード：音声モードのもの以外に、指示、メモ、書類の書き方等が含まれるだろう)
- b) comprehension (音声モード：指示等の理解、日常的な話題の理解、テレビ、ビデオ、ラジオ等のメディアを通しての英語の理解。文字モード：音声モードのものに加え、日常的な広告、メモ、標識、物語などの読解等が含まれるだろう)
- c) Interaction

- 1. スクリプト (始め方や終わり方などが決まっている台本化された状況)：レストラン、ホテル、買い物、手紙等でのやり取り
- 2. スクリプト外状況 (どんな上場面でも起こりうる状況)：感謝する、謝る、依頼する、断わる等の機能表現が用いられる状況

■Cognitively demanding な状況 (より深い思考が必要とされる状況)

- a) self-expression (音声モード：スピーチ、講義、発表。文字モード：レポ

ート、エッセイ、論文等)

- b) comprehension (音声モード：スピーチ、講義の理解等。文字モード：レポート、エッセイ、論文の読解等)
- c) Interaction (音声モード：ディベート、ディスカッション。文字モード：ビジネス・レターのやり取り等)

これらの状況は、より一般的なものであるが、それぞれの状況において言語運用上必要とされる proficiency が比較的明解になっているだろう。

#### IV. 内容と言語形式の関係

ところで、上記のような状況におけるコミュニケーション能力の育成を考える上で、もう一つ忘れてはならないことがある。それは、それぞれの状況にはそれに相応しい「内容」があることである。外国語教育の目的が単に言語形式の獲得ではなく、実際のコミュニケーション状況に「相応しく」対応できる能力を身につけることである以上、まずは、「内容」の理解が言語形式に先立って行われなければならないことになる。しかし、内容重視があまりにも強調されるために、逆に、言語形式(文法など)が軽視され過ぎているのではないか、という懸念をよく耳にする。つまり、そのようなやり方で、言語形式が身に付くのだろうか、というのである。

この点に関していうならば、近年盛んになってきたいわゆる content-area

approach の考え方の下では、外国語の言語形式は内容を学習する過程で「付随的」に身につく、とされている。(Brinton, Snow & Wesche, 1989; Mohan, 1986; Cantoni-Harvey, 1987; Chamot & O'Malley, 1994等参照)。今までの learn to write and learn to read という立場から、"write to learn and read to learn" (Britton, Snow & Wesche, 1989, p.6) という立場への転換が強調されているのである。言い換えると、「内容」を理解したり表現したりする過程で、そのために用いられている言語形式を「付随的」に身につけることができる、というのである(このことを、Hatch & Hawkins (1987) の考え方に沿って言えば、intentional learning (意図的学習)の対象は「内容」にあり、その際に用いられる「言語形式」はincidental learning (付随的学習)の対象となる、と言えるだろう)。

しかし、コミュニケーションや「内容」重視が叫ばれている中で、もっと直接的に文法などの言語形式を教えることの重要性も再認識されてきている。しかし、最近の研究では、文法などの言語形式は従来の方法で学ばれるのではなく、focus on form が自然に生まれる状況下で学ばれるのが最も能率的である、とされている(Doughty & Williams, 1998; Gass, 1997参照)。この考え方によると、学習者は、まず意味を理解しようとするが、その過程で意味理解に支障をきたしたり、あるいは、その意味を伝えるのに有効ないい

方に出会った時にこそ form に着目し、学習者自らが form に「気付く」(noticing, attention, awareness などの用語が用いられている)ことにより、より良く、また、よりたやすく修得される、というのである。

普段の communication の途中でも、会話の全体的な意味を把握する上で「あれっ？」と思うところがあると、学習者はその時に用いられた言語形式を「意識」するようになり、その結果、より良く修得できる、と言えるだろう(Ellis & Gaies (1999) は正にこの点を取り入れた文法学習のテキストである)。

つまり、文法形式の習得も大切だが、それは学習者自身がなんらかの積極的なコミュニケーションを図ろうとしている過程で、「気付いた」ものでなければ本当には身につかない、ということなのである。よく、文法も分かっているのに、どうしてコミュニケーションなんかできるか、という人がいるが、それは正に逆で、実際にコミュニケーションを体験することなく、また、その際の難しさを知らずして、どうして文法の大切さが分かるのか、また、文法の「何を」学ぶ必要があると認識できるのか、ということなのである。

## VII. 終わりに

以上、今日の外国語教育が向かっている方向の特徴について色々な観点から論じてきたが、日本の英語教育はまだまだこのような考え方を取り入れる

ところまで来ているとは言えない。勿論、これらの多くの研究は、必ずしも日本の状況にそのまま当てはまるとは言えないだろう。しかし、今までの伝統的な英語教育の方法の結果が、例えば、IMD の評価に繋がっているとすれば、21 世紀に向けて、我々もより良い英語教育を模索していかなければならない。本稿で述べた様々な外国語教育における新しい試みは、必ずその際の参考になるはずである。

(よしだ けんさく

上智大学外国語学部英語学科長)

## Bibliography

- Baker, C. (1996) *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*, Clevedon: Multilingual Matters
- Britton, D., M. Snow & M. Wesche (1989) *Content-based Second Language Instruction* Rowley: Newbury House
- Brown, H. D. (1994) *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy*. New York: Prentice Hall
- Canale, M. & M. Swain (1980) 'Theoretical bases of communicative approaches to second language and testing' in *Applied Linguistics*, vol.1 no.1
- Cantoni-Harvey, G. (1987) *Content-Area Language Instruction: Approaches and Strategies*, New York: Addison-Wesley
- Chamot, A. & M. O'Malley (1994) *The CALLA Handbook: Implementing the Cognitive Academic Language Learning Approach*, New York: Addison-Wesley
- Cummins, J. (1984) *Bilingualism and Special Education*, Clevedon: Multilingual Matters
- Doughty, C. & J. Williams (1998) *Focus on Form in Second Language Acquisition*, Cambridge: Cambridge
- Ellis, R. & S. Gaies (1999) *Impact Grammar*. Hong Kong: Addison-Wesley Longman
- Gass, S. (1997) *Input, Interaction, and the Second Language Learner*, Hillsdale: Lawrence Erlbaum
- Hatch, E. & B. Hawkins (1987) 'Second-language acquisition : an experiential approach' in Rosenberg (ed.) *Advances in Applied Psycholinguistics*, vol.2, New York: Cambridge
- Hymes, D. (1972) 'On communicative competence' in Pride & Holmes (eds) *Sociolinguistics*. Harmondsworth: Penguin
- 「高等学校学習指導要領」(1960, 1970, 1978, 1989) 文部省
- 「教育課程審議会答申」(1998) 文部省
- McNamara, T. (1996) *Measuring Second Language Performance*, New York: Longman
- Mohan, B. (1986) *Language and Content*, New York: Addison-Wesley
- Nunan, D. (1989) *Understanding Language Classrooms*, New York: Prentice-Hall



----- (1991) 'Communicative task and the language curriculum' in *TESOL Quarterly* 25

----- (1992) *Research Methods in Language Learning*, Cambridge: Cambridge

Savignon, S. (1983) *Communicative Competence: Theory to Practice*. London: Addison-Wesley

鈴木佑治, 吉田研作, 田中茂範, 霜崎実 (1997) 「コミュニケーションとしての英語教育論」アルク

Widdowson, H. (1978) *Teaching English as Communication*, Oxford: Oxford

吉田研作 (1997a) 「Display 活動と Referential 活動」鈴木他

----- (1997b) 「自己表現力と対話力の育成について」鈴木他

Yoshida, K. (1985) 'How much grammar-- a communicative viewpoint (Part A) in 言語の世界 3

----- (1986) 'How much grammar-- a communicative viewpoint (Part B) in 言語の世界 4

----- & K. Yanase (1993) *A Guide to Oral Communication (A), (B), (C)* Tokyo: Buneido

## Internet Sites and References

1) 応用言語学関連サイト

*SIL Bibliography of Language Learning and Applied Linguistics:*

<http://www.sil.org/lingualinks/library/llearning/GFS1665/index.htm>

*Bibliography of Applied Linguistics*

(*Yoshida's Home Page*):

<http://133.12.37.57/fs/eigo/ling/bunken.htm>

*Bilingualism and Bilingual Education Bibliography and Internet Links (Yoshida's Home Page):*

<http://pweb.sophia.ac.jp/~yoshidak/bilingbi.htm>

2) ESL, EFL関連サイト

*The Linguist List's ESL, EFL, and L2 Information page:*

<http://linguistlist.org/esl.html>

*TESL/TEFL/TESOL/ESL/EFL/ESOL Links--Links of Interest to Teachers of English as a Second Language:*

<http://www.aitech.ac.jp/~iteslj/ESL3.html>

3) 応用言語学授業関連サイト

*Dr. Clappitt's online course in Second Language Acquisition:*

<http://ponce.inter.edu/proyecto/in/huma/english4073.html>

*WWW Applied Linguistics Virtual Library--Courses in Applied Linguistics:*

<http://alvl.org/index.cgi?q=1&state=culi0>

4) 言語能力 (proficiency) 基準関連サイト

*ACTFL Proficiency Guidelines:*

<http://www.sil.org/lingualinks/library/llearning/fre583/fre195/may2091.htm>

*Interagency Language Roundtable (ILR) Proficiency Scale--originally FSI (Foreign Service Institute) Scale:*

<http://www.sil.org/lingualinks/library/llearning/fre583/fre195/may2046.htm>

*TESOL ESL STANDARDS:*

<http://www.tesol.edu/assoc/k12standards/it/01.htm>

*The British National Curriculum--Foreign Language*

<http://www.dfes.gov.uk/nc/mflindex.html>

5) その他

*International Institute of Management*

*Development Home Page:*

[http://www.imd.ch/imd\\_home.html](http://www.imd.ch/imd_home.html)

*Yoshiken's Home Page:*

<http://pweb.cc.sophia.ac.jp/~yosida-k>